

『広島平和科学』 25 (2003) pp. 53-80

ISSN0386-3565

Hiroshima Peace Science 25 (2003)

東北タイにおける言語と自称

松尾 雅嗣

広島大学平和科学研究センター

山下 明博

安田女子短期大学

Language and Self-name in Northeastern Thailand

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

Akihiro YAMASHITA

Yasuda Women's College

SUMMARY

The present paper is an attempt to empirically clarify certain aspects of the relationship between language and national or ethnic identity. We use the results of the

sociolinguistic survey conducted in Northern Thailand in 2001. Two categories of variables are used: language variables represented by language ability and home language, and identity variables represented by self-name. The results of qualitative correlation/regression analyses in terms of phi coefficients and logistic regression show that;

(1) language and self-name of a relative minority positively correlate with each other, as many previous studies argued,

(2) a relative majority language, especially its use at home, negatively correlates mutually with the self-name of a relative minority.

(3) the self-name of a relative majority is independent of, that is, neither positively nor negatively correlates with, the relative minority language.

序

本論文は、東北タイ（所謂イサン地方）における言語と民族の関係を、言語能力、家庭言語、自称に着目して、アンケート調査結果にもとづいて実証的に検討することを目的とする。本稿の基礎となった調査は、トヨタ財団の助成（2000年度研究助成「東北タイのラオ人の言語認識と帰属意識：民族紛争不在の事例研究」、代表：山下明博）を得て、2001年3月と9月に、東北タイのコーンケン県、ナコンラチャシマ県、ブリラム県、チャイヤブーン県で行ったものであり、2375名から回答を得た（山下 2003: 46-48）。

地図1 東北タイ（イサン地方）



地図1に示す東北タイには、スモーリー（William A. Smalley）の推定によれば、ラオ語を母語とする約1220万人のラオ人が住む（Smalley 1994: 365）¹⁾。タイにおける言語人口をみると、同じ推定によれば、ラオ語人口は、タイ語（正確にはタイクラン語）人口の約1440万に次ぐ、第2位の地位を占める。しかし、東北タイのラオ人は、今日では多くが自称、他称ともにイサン人という名称を使用しており、またラオ人が日常使用する言語は、通常「ラオ語」で

はなく、「イサン語」と呼ばれる。

東北タイは、18世紀後半タイ人の支配下に入り、ラオ人はタイ人に従属することとなった。そして、19世紀末以降のタイ国民国家形成政策の下で、民族名も、言語名も、そして地域名もすべて「イサン」に変更されたのである(山下 2003: 7)。その結果、今日でもイサン語とラオ語という言語名称も、イサン人とラオ人という民族名称も、前者の普及が顕著であるとはいえ、並存するという状況が出現している。これに加えて、東北タイにおいては、タイ人という自称の普及も著しい。また他方で、地域的には、コラート人という自称を使用する人々も少なくない²⁾。次の表1に示す調査結果は、この状況を如実に示すものである。なお、表に与えた以外の自称も少数使用されているが、省略した。以下の表でも特に断りのない場合を除き、同様である。

表1 東北タイにおける自称

数値は回答者総数 2 3 7 5 人に対する百分比 (複数回答)

タイ人	イサン人	ラオ人	コラート人
92.6	81.7	23.6	36.8

出所：山下 (2003), 110

並存状況は、民族やエスニック集団の自称のみに限らない。自称の並存に対応する形で、言語もまた併用されている。表2に示す調査結果はこれを示すものである。

表2 東北タイにおける言語能力

数値は回答者総数 2 3 7 5 人に対する百分比 (複数回答)

タイ語	イサン語	コラート語	ラオ語
83.7	54.6	27.8	9.4

出所：山下 (2003), 58

表1と2に示されるように、東北タイは多民族社会であり、多言語社会であ

る。本稿は、このような東北タイを事例として一定の国民統合が進んだ多民族社会、多言語社会において、個々の言語の能力や家庭で使用される言語と個々の自称の関係を計量的に明らかにすることを目的とする。このことは、多民族社会、多言語社会における言語と民族の問題を考えることに他ならない。

言語が民族やエスニック集団を規定するという議論は、ドイツ・ロマン主義に遡るとされる (Kedourie 1985: 63-69)。言語が民族やエスニック集団を規定する唯一の要因ではないにせよ、いくつかの重要な要因のうちのひとつであることは今日でも多くの論者が認めるところである (松尾 1992: 29)。しかも、この理念は、分析概念であるのみならず、政治的目標でもあり、多くの歴史的事例を観察することができる (松尾 1992, 1996, 1999)。そして、シュニレルマン (Victor A. Shnirelman) がトランスコーカサスにおいて詳細に跡付けているように (Shnirelman 2001)、今日においてもなお、言語と民族を一体化する営みは止むことがない。

しかし、他方で、言語と民族ないしエスニック集団が一对一に対応するという命題は決して普遍的に妥当するものではないことも、また周知の事実である。同じ言葉を話す別個の民族はボスニア紛争以来一般にもよく知られた存在であるし³⁾、別の言語を使用するふたつ以上の集団から成る民族やエスニック集団の存在も知られている⁴⁾。

このような例外は認めるにせよ、言語が民族を既定する重要な一要因であることは否定できまい。この立場からすれば、「可視的などのような特質も、民族意識の維持には、必須のものではない」(Connor 1987: 202、傍点筆者)とするコナー (Walker Connor) の見解を、言語を重視する見解の対極に位置づけることも可能であろう。しかし、ここで注目すべきはコナーが民族意識という言葉を使用していることである。既に他の場所で論じたように (松尾 1991)、言語と民族の関係であれ、他の客観的規定要因と民族の関係であれ、実態としての問題と、それがどう認識されているかという認識の問題とを、厳密に区別して考える必要がある。そして、重要なのは実態よりもむしろ認識である。再びコナーの言葉を借りるならば、「行動をもたらすのは現実ではなくて人々が信ずることである」(Connor 1987: 206 強調原文)。

言語と民族あるいはエスニック集団の関係がどうであれ、従来の議論に欠けている視点が、実態と認識の問題に加え、もうひとつある。多民族社会、多言語社会の問題である。住民が複数の言語を日常的に使用する多言語社会は、社会言語学者の関心は別として、議論の対象から除外されてきたと言っても過言ではない。多くの議論が対象としたのが、現実には言語と民族が一对一には対応しない社会や集団であったにもかかわらず、明示的に多言語社会における問題としては論じられなかったという意味である。

本稿で東北タイを取り上げるのは、明らかな多言語社会、多民族社会を対象として言語と民族の関係の一端を解明することを目的とするからである。

1 データと方法

本稿で使用するデータは、2001年に実施されたアンケート調査の結果である。詳細については、山下(2003)を参照されたい。

分析には以下の3つの変数群を用いた。

言語能力

家庭言語

自称

民族やエスニック集団の弁別基準として言語が重要な意味を有するとされる時、一般には特定の言語の使用能力が想定されていると思われる。しかし、明示的な議論は行われていない。それが母語であるのか、特定の言語の日常的使用であるのか、(第二言語などとしての)使用能力であるのか、特定の言語に対する愛着や矜持であるのか、あるいは特定の言語(能力)の共有意識であるのかは⁵⁾必ずしも定かでないのが現状である。これに加えて、インドのある部族の指導者の「[民族にとって]言語は母であり、文字は父である」という言葉(Singh and Manoharan 1993: 28)が示すように、文字を重視する考え方もある。印刷された文字の共有が、民族という想像の共同体の形成に寄与したというアンダーソン(Benedict Anderson)の議論を受けて、東北タイを含む東南アジア大陸部においては、重要なのは言語というよりむしろ文字の共有であった(Keyes

1995: 139-141) という議論すらある⁶⁾。従って、言語使用能力と家庭言語をもって言語という要因を代表させることに完全な合意が成立しているわけではない。しかしながら、本稿では、第二言語をも含めた言語能力と家庭言語を変数として使用する。

言語能力のデータは、「どの言語を自由に話すことができるか」という設問に対する回答である。この設問は複数回答を許容しており、その結果は既に表2に示した。今回の分析の基礎になったような自己申告の調査では、「自由に話すことができる」か否かは回答者の主観に依存する。それゆえ、本稿で論ずる言語能力はあくまで回答者の主観を反映するものであると理解する。

言語の使用能力については表2からも明らかなように、複数回答であるので、これを対象とする4つの言語の使用能力ごとに、「使用能力あり」を1、「なし」を0とする、別個の変数とした。これにより、特定の言語使用能力と特定の自称との関係を明らかにすることを期待したからである。

家庭言語として用いたデータは、実は、母親に対して使う言語である。父親に対して使用する言語とほとんど差異がないことと、子供に対して使用する言語とは相当の差異があることのふたつの理由で、母親に対して使用する言語をもって家庭言語とした(山下 2003: 54-56)。母語という用語を使用しなかったのは、次の表3に見るように、家庭における言語使用もまた多言語的だからである。家庭言語も複数回答であるので、言語能力と同様に対象とする4言語ごとに別個の変数とした。この変数も回答者の自己申告であるという意味で、実態をそのまま反映するというよりは回答者の認識を反映するものである。家庭で使用される主要な言語を次の表3に示す。

表3 家庭言語

数値は回答者総数2375人に対する百分比(複数回答)

タイ語	イサン語	ラオ語	コラート語
38.8	54.1	4.2	26.3

出所：山下 (2003), 55

自称の使用に関するデータは既に表 1 に示したとおりである。自称についても、言語能力とまったく同様に 4 つの別個の変数とした。これにより、特定の言語の使用能力と、特定の自称の使用が有意な関連を示すかを明らかにできると考えたからである。

自称、即ち自分自身を何と呼ぶかが、直ちに民族やエスニック集団に対する帰属意識を表すものであるか否かについては異論がありえよう。これについては、さしあたり民族やエスニック集団に対する帰属意識を表すものと仮定しておく。また、この仮定が妥当なものであるとしても、自称が民族やエスニック集団への帰属意識を代表する最も適切な変数であるか否かという問題も残ることは否定しない。

以上 3 種類のデータとその変換による新たな変数の作成を表 4 にまとめておく。上述のどの変数についても、データは自己申告によるものであり、このようなデータが客観性を欠くという批判は当然である。しかし他方で、先に指摘したように、重要なのは実態や現実ではなくむしろ認識であるという立場からすれば、人々の主観を表現するデータのほうが望ましいとも言うことができる。

表 4 変数の変換

	変数	変数名	値
言語能力	タイ語を自由に話せる	LCT	1 = 話せる 0 = NO
	イサン語を自由に話せる	LCI	
	ラオ語を自由に話せる	LCL	
	コラート語を自由に話せる	LCK	
家庭言語	タイ語を使用	HLT	1 = 話す 0 = NO
	イサン語を使用	HLI	
	ラオ語を使用	HLL	
	コラート語を使用	HLK	
呼称	自分をタイ人と呼ぶ	NAMET	1 = 呼ぶ 0 = 呼ばない
	自分をイサン人と呼ぶ	NAMEI	
	自分をラオ人と呼ぶ	NAMEL	
	自分をコラート人と呼ぶ	NAMEK	

以上の変数に加え、回答者の居住地域と性別を独立変数として加えることを検討した。地域分布は、次の表に示すように、「コーンケン」と「ナコンラチャシマおよびその近隣」のふたつだけである。回答者数は、表5に示すようにほぼ同数である。

表5 地域分布
数値は百分比

コーンケン	ナコンラチャシマ及びその近隣
46.3	53.7

出所：山下 (2003), 169

このふたつの地域は、前者がイサン語地域、後者がコラート語地域であるという際立った違いがあり、次の表6に示すように本稿で使用する変数との独立性が極めて低い。家庭言語としてラオ語を使用する場合と、自身をタイ人と呼ぶ場合を除いて、ふたつの変数が独立であるという仮説は有意水準1%ですべて棄却される。後者の例外、即ちタイ人という自称は、地域に関わりなく使用されることを意味する。

表6 地域と他の変数とのカイ二乗値

	変数	変数名	カイ二乗値
言語能力	タイ語を自由に話せる	LCT	9.061
	イサン語を自由に話せる	LCI	532.871
	ラオ語を自由に話せる	LCL	6.605
	コラート語を自由に話せる	LCK	790.200
家庭言語	タイ語を使用	HLT	131.093
	イサン語を使用	HLI	924.941
	ラオ語を使用	HLL	2.614
	コラート語を使用	HLK	730.205
呼称	自分をタイ人と呼ぶ	NAMET	0.503
	自分をイサン人と呼ぶ	NAMEI	84.038
	自分をラオ人と呼ぶ	NAMEL	35.697
	自分をコラート人と呼ぶ	NAMEK	1193.100

他の説明変数との独立性が極めて低いので、地域は最終的な分析からは除いた。

性別に関しては、回答者の男女比は表7に示すようにほぼ同数である。

表7 性別比率

数値は百分比

男性	女性
50.4	49.6

出所：山下 (2003), 169

しかし、地域とは逆に、この変数は次の表8に示すように他の変数と独立である。独立性の仮説はどの変数との関係においても5%水準で棄却できない。従って、性という変数は分析から除いた。

表8 性と他の変数とのカイ二乗値

	変数	変数名	カイ二乗値
言語能力	タイ語を自由に話せる	LCT	0.075
	イサン語を自由に話せる	LCI	2.803
	ラオ語を自由に話せる	LCL	2.013
	コラート語を自由に話せる	LCK	2.982
家庭言語	タイ語を使用	HLT	2.006
	イサン語を使用	HLI	4.285
	ラオ語を使用	HLL	0.051
	コラート語を使用	HLK	0.002
呼称	自分をタイ人と呼ぶ	NAMET	3.711
	自分をイサン人と呼ぶ	NAMEI	0.309
	自分をラオ人と呼ぶ	NAMEL	0.005
	自分をコラート人と呼ぶ	NAMEK	1.973

なお、予備的に行ったロジスティック回帰分析においても性と地域の2変数は、有効な変数としてはほとんど機能しなかった。このことも、このふたつの

変数を分析から除いた付加的な理由である。

上述の言語に関する変数と自称に関する変数の関係を明らかにすることが本稿の目的であり、このために両者の関連を探るふたつの手法を試用した。

ひとつは、属性変数間の対称な連関の指標としてファイ()係数を算出した。他のひとつは、二変数間の非対称な関係の指標を得るためロジスティック回帰分析を用いた。ロジスティック回帰の使用は、従属変数がすべて二値の質的データであることによる。上述の変数はすべて二値の属性データであり、独立変数としてはダミー変数を用いた。ロジスティック回帰の場合、本来なら、独立変数には質的データ(属性データ)は使用できない。むしろ、対数線型モデルを使用すべきであるが、対数線型モデルの場合、使用できる変数の数の制約が厳しいことと、ロジスティック回帰においても、ダミー変数の使用も許容されることから、便法として、この方法を用いた。なお、モデルの適合度検定の手法としては、コックスとスネルのR二乗値を用いた。また、以下の計算は、すべてSPSSによった。

2 結果

2.1 変数群内の相関

以下の議論の前提として、言語能力、家庭言語、自称という3つの変数群に関してそれぞれの内部でどの程度の相関が見られるかを示しておく。

表9に示すように、一般には任意の言語の言語能力が他の言語の能力と、正負にかかわらず強い相関をもつことはない。ただし、イサン語能力とコラート語能力の間には弱い負の相関が認められる。

次に家庭言語間の関係を検討する。この場合、任意の言語の家庭での使用と他の言語の家庭での使用の間には、表10に示す如く、明らかな負の相関が観察される場合がある。具体的には、家庭言語としてのタイ語とイサン語の間、家庭言語としてのイサン語とコラート語の間には明らかな負の相関が認められる。しかしながら、タイ語とコラート語の間にはこの関係は認められない。こ

の点に関しては、後に論ずる。

表 9 言語能力間の相関

上段はファイ係数、下段は有意水準を示す。

	イサン語能力 LCI	ラオ語能力 LCL	コラート語能力 LCK
タイ語能力 LCT	-.044 .032	.041 .048	-.078 .000
イサン語能力 LCI		.207 .000	-.260 .000
ラオ語能力 LCL			.009 .667

表 10 家庭言語間の相関

上段はファイ係数、下段は有意水準を示す。

	家庭言語 イサン語 HLI	家庭言語 ラオ語 HLL	家庭言語 コラート語 HLK
家庭言語タイ語 HLT	-.425 .000	-.066 .769	.010 .631
家庭言語イサン語 HLI		-.044 .030	-.542 .000
家庭言語ラオ語 HLL			-.091 .000

最後に、任意の自称の使用と他の自称の使用の間には、表 1 1 に見るように、有意な相関はまったく認められない。

表 1 1 自称間の相関

上段はファイ係数、下段は有意水準を示す。

	イサン人を 自称 NAMEI	ラオ人を 自称 NAMEL	コラート人を 自称 NAMEK
タイ人を自称 NAMET	.032 .116	-.047 .021	.026 .207
イサン人を自称 NAMEI		.191 .000	-.113 .000
ラオ人を自称 NAMEL			-.117 .000

2.2 言語と自称の相関

次に変数群相互の関係を吟味する。まず最初に、言語能力と家庭言語の関係を検討する。結果を表 1 2 に示す。なお、変数名の LC は言語能力、HL は家庭言語を示す。また変数名末尾の、T, I, L, K は、タイ語、イサン語、ラオ語、コラート語をそれぞれ表わす。

表 1 2 言語能力と家庭言語

上段はファイ係数、下段は有意水準を示す。

	HLT	HLI	HLL	HLK
LCT	.238 .000	-.008 .711	-.011 .595	-.061 .003
LCI	-.279 .000	.607 .000	.029 .153	-.378 .000
LCL	-.076 .000	.078 .000	.358 .000	-.085 .000
LCK	.082 .000	-.487 .000	-.040 .050	.712 .000

個々の言語について、当然予想されることであるが、任意の言語の能力と家庭でのその言語の使用の相関は高い。表 1 2 から明らかなように、イサン語と

コラート語については、この傾向が特に顕著である。異なる言語間にはこの傾向は認められない。

他方、イサン語の能力と家庭言語としてのコラート語の使用、コラート語の能力と家庭言語としてのイサン語の使用の間には、明らかな負の相関が観察される。これについては、後述する。また、イサン語の能力と家庭言語としてのタイ語の使用の間にも一定の負の相関が認められる。

次に、言語と自称の間にどのような関係が認められるかを、表13によって検討する。表13には、2種類の言語変数（言語能力と家庭言語）と、自称変数との間のファイ係数を示す。自称を示す変数（NAME）の末尾のT, I, L, Kは、タイ人、イサン人、ラオ人、コラート人にそれぞれ対応する。

表13 言語能力・家庭言語と自称
上段はファイ係数、下段は有意水準を示す。

	NAMET	NAMEI	NAMEL	NAMEK
LCT	.050 .016	-.037 .068	-.048 .018	-.042 .038
HLT	-.039 .059	-.244 .000	-.055 .007	.170 .000
LCI	.013 .517	.279 .000	.182 .000	-.446 .000
HLI	.007 .735	.306 .000	.184 .000	-.579 .000
LCL	-.057 .005	.067 .001	.147 .000	-.067 .001
HLL	-.013 .514	.012 .571	.201 .000	-.006 .760
LCK	.025 .222	-.068 .001	-.119 .000	.629 .000
HLK	.015 .450	-.093 .000	-.160 .000	.663 .000

タイ人を自称することと個別言語の言語能力及び家庭言語としての使用との間には、ファイ係数の値がほぼゼロに近いことからして、有意な相関は認められない。換言すれば、タイ人を自称することと特定の言語の使用能力や家庭での使用は独立である。タイ語を含めた特定の言語の使用能力がタイ人という自称

の使用をとりわけ増減させているわけでもなければ、特定の言語を家庭で使用するがタイ人という自称の使用を増減させるわけでもない。また、逆に、タイ人という自称の使用が特定言語の能力と家庭での使用に明らかな影響を与えているわけでもない。このことは、今日の東北タイにおいては、タイ人という言葉が「国民意識」が言語能力や家庭言語、ひいてはそれに代表される民族やエスニック集団に関わりなく浸透していることを示すものであろう。19世紀末以来のタイ国民国家形成の試みが（山下 2003: 20-25）東北タイにおいて一定の成功を収めている証であると解することもできよう。

同様に、タイ語能力や家庭言語としてのタイ語の使用と、タイ人という自称を含めた自称の間にも、有意な相関は認めがたい。このことは、表2に示した東北タイにおけるタイ語の普及の反映と理解すべであらう。言語能力については、自称と関わりなく、タイ語を使用できるのが実情である。但し、タイ語の家庭での使用とイサン人という自称の間に弱い負の相関が認められる。

「タイ人」以外の自称と、対応する言語能力及び家庭言語の間には相当の相関が認められる。特に、イサン語能力及び家庭でのイサン語使用とイサン人の自称の間、コラート語能力及び家庭でコラート語使用とコラート人の自称の間には高い相関が認められる。この密接な関係をどう理解すべきかについては、後に検討する。ラオ語とラオ人の自称の関係はこれに比べて明らかに弱い。

なお、この表から、家庭でのイサン語使用及びイサン語能力と、コラート人の自称の間には、強い負の相関関係があることが観察される。イサン語能力をもつこと及び家庭でイサン語を使用することと、コラート人を自称することが背反することは明らかである。しかし、イサン人を自称することと、コラート語能力をもつこと及び家庭でコラート語を使用することとの間には、このような関係は認められない。

2.3 言語と自称間のロジスティック回帰

次に、言語と自称の間の非対称な関係の有無を検討するため、ロジスティック回帰分析を試みた。これは、一般化して言えば、言語が民族を規定するのか、逆に民族（への帰属意識）が言語を規定するのか、あるいは相互規定的である

のかを、言語能力、家庭言語と自称の関係から検討することを目的とするものである。

表14には、言語能力と家庭言語を従属変数とし、自称を独立変数とした結果を示し、表15には逆に自称を従属変数とし、言語能力と家庭言語を独立変数とした結果を示す。計算法としては、変数減少法を用いた。表には、残った有効な変数と定数のみを示し、それぞれロジスティック回帰係数、オッズ比およびコックスとスネルのR二乗値を付す。

このふたつの表は、表中の従属変数が有効な独立変数とその回帰係数と定数で表わされることを示す。例えば、表14の「タイ語能力(LCT)」と自称との関係が、

$$LCT = 1.628 + 0.459NAMET - 0.271NAMEI - 0.275NAMEL - 0.295NAMEK$$

で表わされることを示す。

まず、表14に見るように、タイ語の能力(LCT)についても、タイ語の家庭での使用(HLT)についても、オッズ比とR二乗値からして、自称は有意な説明変数足りえない。他方、表15から、どの言語の言語能力も、どの言語の家庭言語としての使用も、タイ人を自称すること(NAMET)の有意な説明変数ではない。これは2.2で述べた、タイ人を自称することと、個別言語の能力や家庭での使用との間に、有意な関係が認められなかったことと等価である。そして、その解釈もまた同様である。

タイ語の場合と異なり、イサン語能力と家庭言語としてのイサン語の使用は、表14のオッズ比とR二乗値からして、イサン人を自称するとき大きく増加し、コラート人を自称するとき大きく減少する。イサン人の自称は、表15から、イサン語能力があるときも、イサン語を家庭で使用するときも大きく増加するが、適合度はさほどよくない。また、コラート語能力と家庭でのコラート語使用は、表15に示す式から除かれているように、イサン人という自称の使用には影響しない。これをどう理解するかについては、後に検討する。

表 1 4 言語能力、家庭言語を従属変数とするロジスティック回帰

従属変数	有効な独立変数	回帰係数	オッズ比	R 二乗値
LCT	NAMET	0.459	1.583	0.008
	NAMEI	-0.271	0.763	
	NAMEL	-0.275	0.760	
	NAMEK	-0.295	0.745	
	定数	1.628	5.093	
HLT	NAMET	-0.292	0.747	0.078
	NAMEI	-1.206	0.299	
	NAMEK	0.651	1.917	
	定数	0.537	1.712	
LCI	NAMEI	1.470	4.347	0.247
	NAMEL	0.586	1.797	
	NAMEK	-1.986	0.137	
	定数	-0.424	0.655	
HLI	NAMEI	1.904	6.712	0.367
	NAMEL	0.598	1.818	
	NAMEK	-2.911	0.054	
	定数	-0.505	0.604	
LCL	NAMET	-0.552	0.576	0.025
	NAMEI	0.471	1.602	
	NAMEL	0.875	2.399	
	NAMEK	-0.373	0.689	
	定数	-2.321	0.098	
HLL	NAMEI	-0.522	0.593	0.035
	NAMEL	2.039	7.681	
	定数	-3.578	0.028	
LCK	NAMEL	-0.453	0.635	0.337
	NAMEK	3.276	26.482	
	定数	-2.587	0.075	
HLK	NAMEL	-0.944	0.389	0.378
	NAMEK	3.763	43.096	
	定数	-2.991	0.050	

表 1 4 より、ラオ語の能力と家庭でのラオ語使用は、ラオ人という自称の増加に伴い増大するが、有意な回帰式は得られない。また、表 1 5 より、家庭言語としてラオ語を使用するとき、ラオ人という自称を増加させるが、この場合も適合度は低い。このように、ラオ語の能力および使用とラオ人という自称

との間には、一定の相互作用が認められるが、統計的に有意なものではない。

表 1 5 自称を従属変数とするロジスティック回帰

従属変数	有効な独立変数	回帰係数	オッズ比	R二乗値
NAMET	LCT	0.538	1.712	0.008
	LCI	0.316	1.371	
	LCL	-0.745	0.475	
	LCK	0.363	1.438	
	定数	1.916	6.791	
NAMET	HLT	-0.297	0.743	0.001
	定数	2.649	14.142	
NAMEI	LCI	1.538	4.657	0.076
	定数	0.840	2.317	
NAMEI	HLT	-0.737	0.479	0.107
	HLI	1.443	4.234	
	定数	1.269	3.557	
NAMEL	LCT	-0.331	0.719	0.054
	LCI	0.673	1.959	
	LCL	0.847	2.333	
	LCK	-0.548	0.578	
	定数	-1.275	0.279	
NAMEL	HLI	0.840	2.317	0.075
	HLL	2.053	7.792	
	HLK	-0.406	0.666	
	定数	-1.710	0.181	
NAMEK	LCI	-2.109	0.121	0.420
	LCK	3.396	29.853	
	定数	-0.533	0.587	
NAMEK	HLT	0.421	1.523	0.433
	HLI	-1.670	0.188	
	HLL	0.505	1.656	
	HLK	3.159	23.537	
	定数	-0.835	0.434	

コラート語の能力と家庭での使用は、表 1 4 に示すように、コラート人を自称するとき極度に増大する。同時に、表 1 5 から明らかなように、コラート語の能力を有するときも、家庭でコラート語を使用するときも、コラート人という自称が大幅に増大する。コラート語とコラート人という自称の関係は明らかに相互補強的である。

しかし、ことはそれほど単純ではない。イサン語能力と家庭でのイサン語使用は、明らかにコラート人という自称を減少させる要因であるからである。

3 考察

3.1 言語能力と家庭言語

前節に述べた結果から、以下の諸点を本稿の分析の帰結としてまとめることができよう。但し、ラオ人と、ラオ語については解答者数が少数であること、既に述べたような本来的には同一と見なすべきイサン人、イサン語との関係を今回の調査では明らかにできなかったことというふたつの理由により以下の議論からは原則として除く。

まず第一に、言語使用と言語能力については、次のように言うことができよう。

(1) 多言語社会では当然のことであるが、任意の言語の能力と他の言語能力は特に背反しない。例外は、イサン語能力とコラート語能力の間に弱い負の相関が見られることだけである。

(2) これに対して、任意の言語の家庭での使用は、他の言語の家庭での使用と背反的である。家庭言語としてのタイ語とイサン語、家庭言語としてのイサン語とコラート語の間には強い負の相関がある。

(3) 任意の言語の能力とその言語の家庭での使用の間には、これも予想されることであるが、正の相関が認められる。イサン語とコラート語についてはこの相関は大である。

(4) 任意の言語の家庭での使用と他の言語の能力の関係は、単純ではない。家庭言語としてのタイ語の使用は、イサン語能力とは弱い負の相関があるが、コラート語能力とは独立である。家庭言語としてのイサン語の使用は、コラート語能力と強い負の相関があるが、タイ語能力とは独立である。家庭言語としてのコラート語の使用は、イサン語能力と大きな負の相関があるが、タイ語能力とは独立である。

以上4点から、第一に、任意の言語の能力とその言語の家庭での使用は相互補強的であること、第二に、タイ語とコラート語の関係を除き、任意の言語は

他の言語と家庭言語として排他的であること、第三に、任意の家庭言語は他の言語の能力と排他的であること、但しこれはタイ語能力については妥当しないこと、と結論できるであろう。タイ語能力が他の言語の家庭での使用と背反しないことは、既に述べた理由による。以上述べた帰結から、背反的な負の相関関係を抜き出して図示すると次の図1のようになる。

要するに、任意の言語の能力とその家庭での使用は、相互補強的であるのに対し、任意の言語の家庭での使用と他の言語の能力は、背反的である。例外は、家庭言語としてのタイ語とコラートの間に背反関係が認められないことと、タイ語能力と家庭言語の間に背反関係が認められないことである。

3.2 言語能力及び家庭言語と自称

次に、一方における家庭言語及び言語能力と、他方における自称との関係については、次のような結果が得られた。

(1) タイ人を自称することと、タイ語を含む任意の言語の能力や任意の言語の家庭での使用との間には、有意味な相関関係も回帰関係も認められない。同様に、タイ語の能力や家庭でのタイ語の使用と、任意の自称の間にも、有意味な相関関係も回帰関係も認められない。例外は、家庭言語としてのタイ語の使用とイサン人という自称の間に、弱い負の相関が認められることだけである。

(2) イサン語能力及び家庭でのイサン語使用とイサン人の自称の間、コラート語能力及び家庭でコラート語使用とコラート人の自称の間には高い正の相関が認められる。また、統計的に有意ではないが、ラオ語の能力および家庭での使用とラオ人という自称との間には、一定の相関が認められる。このことから、任意の言語の能力あるいは家庭での使用とそれに対応する自称の間には、相互補強的な関係があると言ってよからう。

(3) これに対して、次の図2は、図1に自称と家庭言語及び言語能力との負の相関を加えたものである。図2に示すように、一方における任意の言語の能力及び家庭での使用と、他方における当該の言語とは異なる自称は、互いにマイナスに寄与する。この現象は、特定の民族や言語が、他の民族や言語を排除するという命題⁷⁾を実証することによって、言語と民族が相互補強的である

という上述の命題を補強するものであると言える。

図1 言語能力と家庭言語間の負の相関

細い線は弱い負の相関を、太い線は強い負の相関を示す。

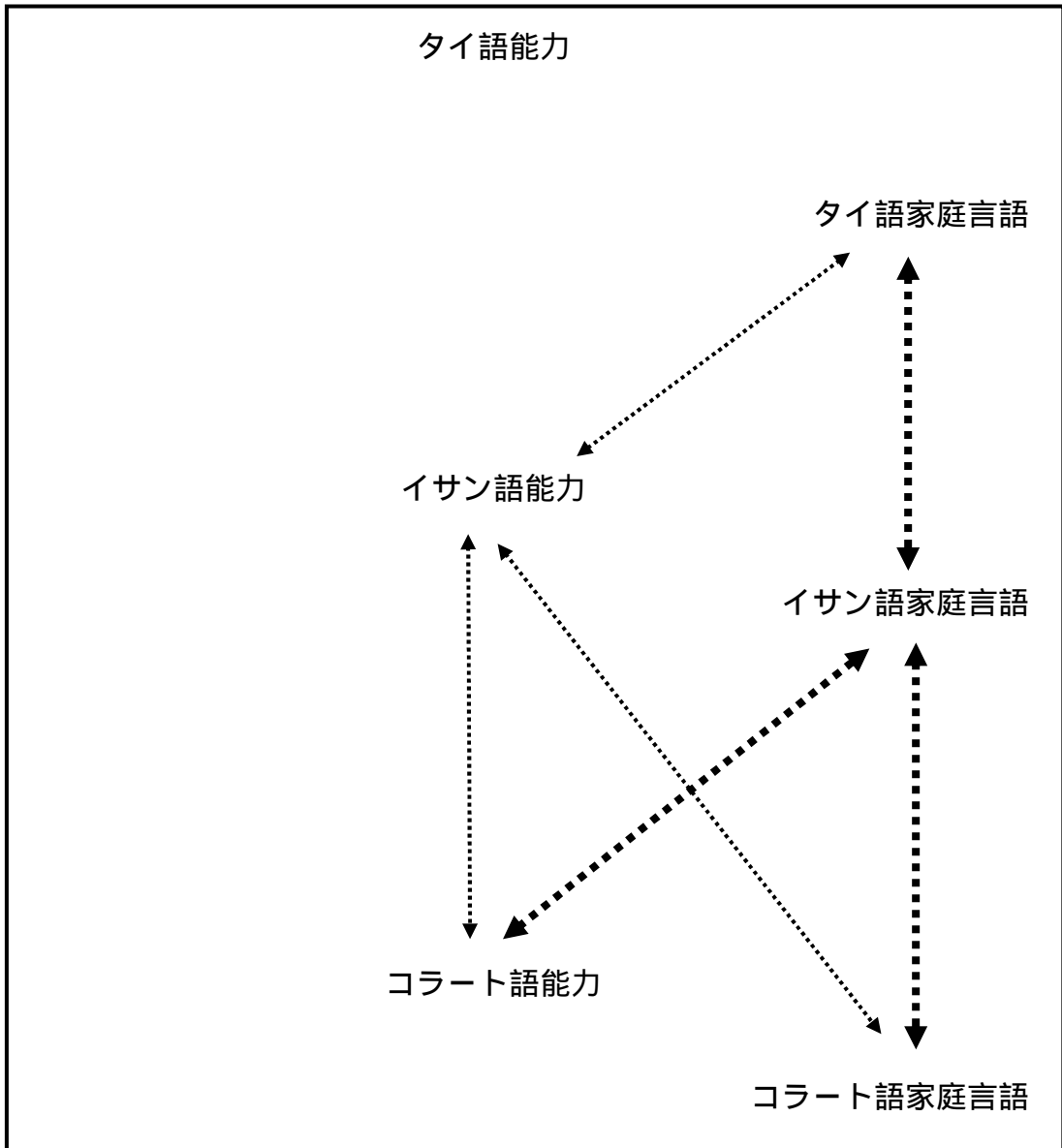
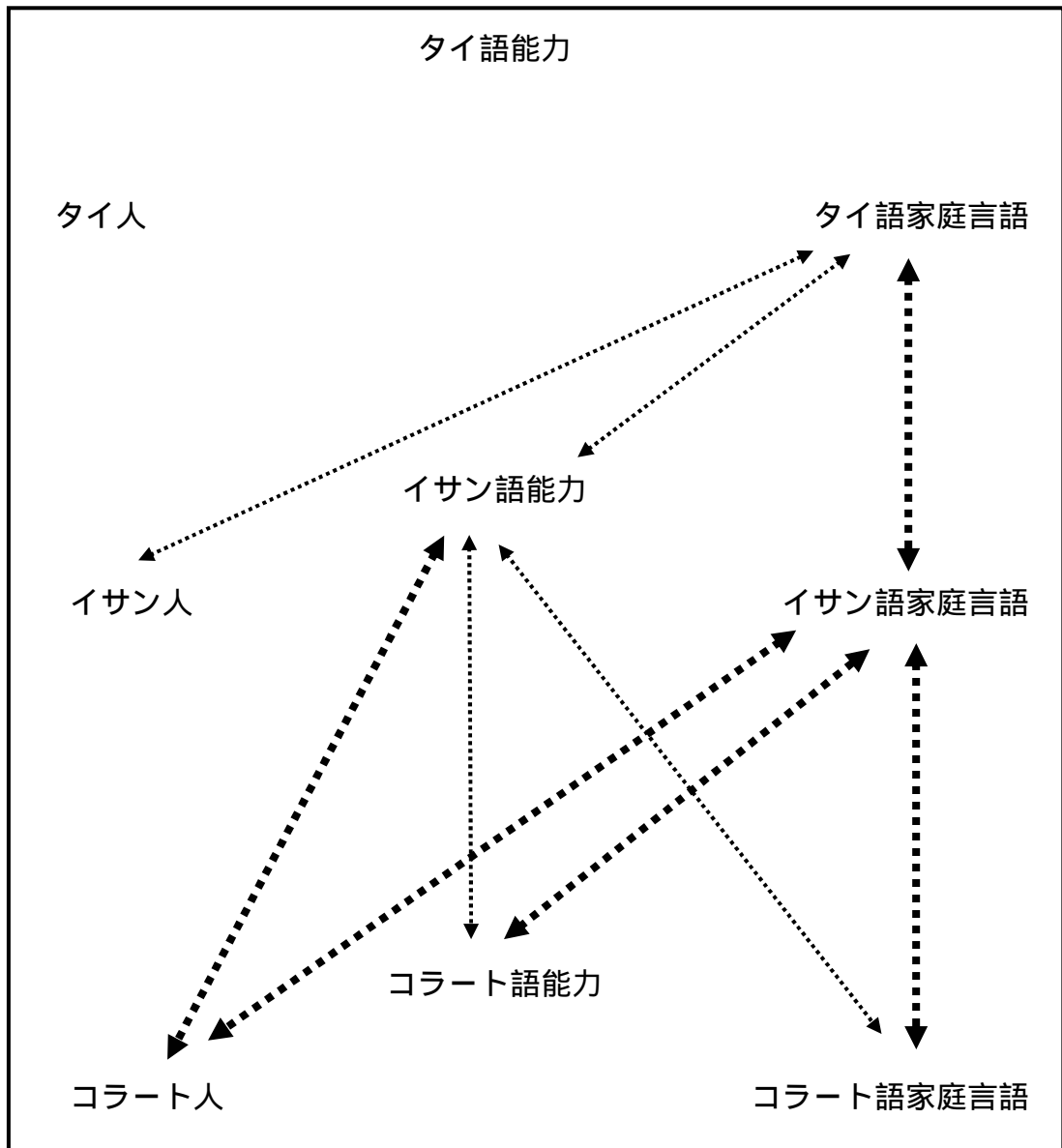


図2 言語能力、家庭言語、自称間の負の相関

細い線は弱い負の相関を、太い線は強い負の相関を示す。



しかし、ここでもまた、例外がある。図2から明らかなように、イサン語能力も家庭でのイサン語使用も、コラート語能力も家庭でのコラート語使用も、タイ人という自称と背反しない。また、コラート語能力もコラート語の家庭での使用もイサン人という自称とも背反しない。これについては、後にさらに検

討する。

以上の考察から、言語と民族（より正確に民族やエスニック集団への帰属意識）が密接な相互規定関係にあることは、東北タイにおいても明らかである。しかも、一部例外はあるものの、任意の言語の能力や家庭での使用と、他の言語の能力や家庭での使用、あるいは他の言語に対応する自称との間には明らかな背反関係があることは、言語と民族の密接な関係をさらに裏付けるものである。

3.3 理論的拡張

以上述べたように、一般に主張される言語と民族の関係は東北タイにおいても妥当すると結論することができよう。しかしながら、既に見たように、幾つかの例外が存在する。その最大のものは、東北タイの人々は言語能力や家庭言語に関わらずタイ人を自称し、何人を自称するかにかかわらずタイ語を使用する能力をもつということである。勿論、家庭言語については家庭でタイ語を使用する回答者の比率は表3に示したように4割に満たないので、「何人を自称するからかわらず、家庭でタイ語を使用する」という強い命題が成立するわけではない。しかし、自称が家庭でのタイ語の使用を左右しないことは既に述べたとおりである。言語についてはリング・フランカという便利な概念があるが、自称や民族についてはこれに相当する通念はない。

これに加えて、また幾つかの例外があることは既に指摘したとおりである。このような例外は、次のような、多民族社会、多言語社会を想定した仮定を導入することによって理解すべきであろう。

第一の仮定：従来の研究が暗黙に前提してことであり、取り立てて論ずべきことでもないが、言語、我々の場合言語能力及び家庭言語、と、自称に代表される民族やエスニック集団への帰属意識との関係は、国家や、行政単位や、（特定の国家や行政単位の内部に包摂されるとは限らない）地域といった、地理的政治的単位に依存する。従って、言語と民族の関係を考察するときには、国家や行政単位や地域といった、地理的政治的単位を考慮に入れる必要がある。このことは、民族やエスニック集団にとってどの範囲が意味のある単位であるか

とも関わる。

第二の仮定：言語と民族あるいはエスニック集団の関係は、一定の地理的、政治的単位、この場合東北タイあるいはタイ全土、において集団が置かれた地位、特に単に数の上だけではない多数派であるか少数派であるかという地位、に依存する。第一の仮定と合わせれば、この仮定は、任意の言語なり民族あるいはエスニック集団は、一般には、政治的地理的範囲に依存して、相対的多数派言語・集団でも、相対的少数派言語・集団でもありうることを意味する。

このふたつの前提の下で、本稿で示した様々な結果は、次の原則により例外も含め矛盾なく説明できる。

(1) 任意の政治的地理的単位において、相対的少数言語とその自称は、相互に補強しあう。

(2) 任意の政治的地理的単位において、相対的多数派言語は、地位において隣接する相対的少数集団の自称と背反的である。ここで、「地位において隣接する」という制約を付すのは、些かこじつけめくが、3集団以上の関係を考察するときには、このような形での何らかの制約が必要だからである。その典型的な事例を「入れ子型紛争」に見ることができよう(松尾 1996, Matsuo 1999)。

(3) 任意の政治的地理的単位において、相対的多数派の自称は、相対的少数言語と相互補強的でもなければ背反的でもない。

イサン人・イサン語は、タイ国家全体をとったとき相対的少数派であり、コラート人・コラート語は、東北タイにおいて(も)相対的少数派である。従って、この場合原則(1)からして、言語と自称は相互補強的である。これに対して、タイ語の能力と使用及びタイ人という自称はタイという国家において相対的多数派であり、東北タイにおいて相互に補強し合うとは限らない。むしろ、既に述べたように、タイ語の能力と使用は、東北タイにおいても自称や他の言語の能力や使用と関わりがない。また、タイ人という自称は、民族的タイ人のみならず、政治的地理的単位をも表わす。国民としてのタイ人である。その限りにおいてタイ人という自称が、原則(3)からして、民族の自称や、タイ語

以外の言語の能力と使用と独立であっても不思議はない。

特定の言語や自称が、他の言語や自称のマイナス要因になるのであれば、イサン語の使用や能力、コラート語の使用や能力、イサン人という自称の使用、コラート人という自称の使用もまた、他の民族の自称や他の言語の能力と使用にマイナスの要因となるはずである、例えば、タイ語の能力や使用とタイ人という自称の使用にマイナスに作用するはずである。ところが、例外として言及し、また図(1)及び(2)に示したように、コラート語の能力や家庭での使用はイサン人という自称と背反しない。イサン人という自称が、民族的イサン人のみならず、地理的イサン人をも表現しうると考えるならば、イサン人という自称の使用が、コラートの能力と使用にマイナスに作用しないことと、コラート語の能力と使用がイサン人という自称の使用にマイナスに作用しないことは、容易に理解できる。同様に、イサン語の能力や家庭での使用もタイ人という自称と背反しない。従って、上述の原則(2)のように抑制・背反の方向は一方的である、(図で言えば)下方に向かうと考えるべきである。これまでの議論や図に示した結果を説明する原理としては、原則(2)と(3)が最も単純であろう。相対的多数派言語、特に家庭言語は、隣接する相対的少数派の自称に対して明らかに抑制的である。この原則(2)は、双方向性を前提とした従来の議論と明らかに異なる点である。

また、タイ語能力と家庭でのタイ語の使用が、コラート人という自称と独立であることは、地位の上で近接しないことによって説明されよう。

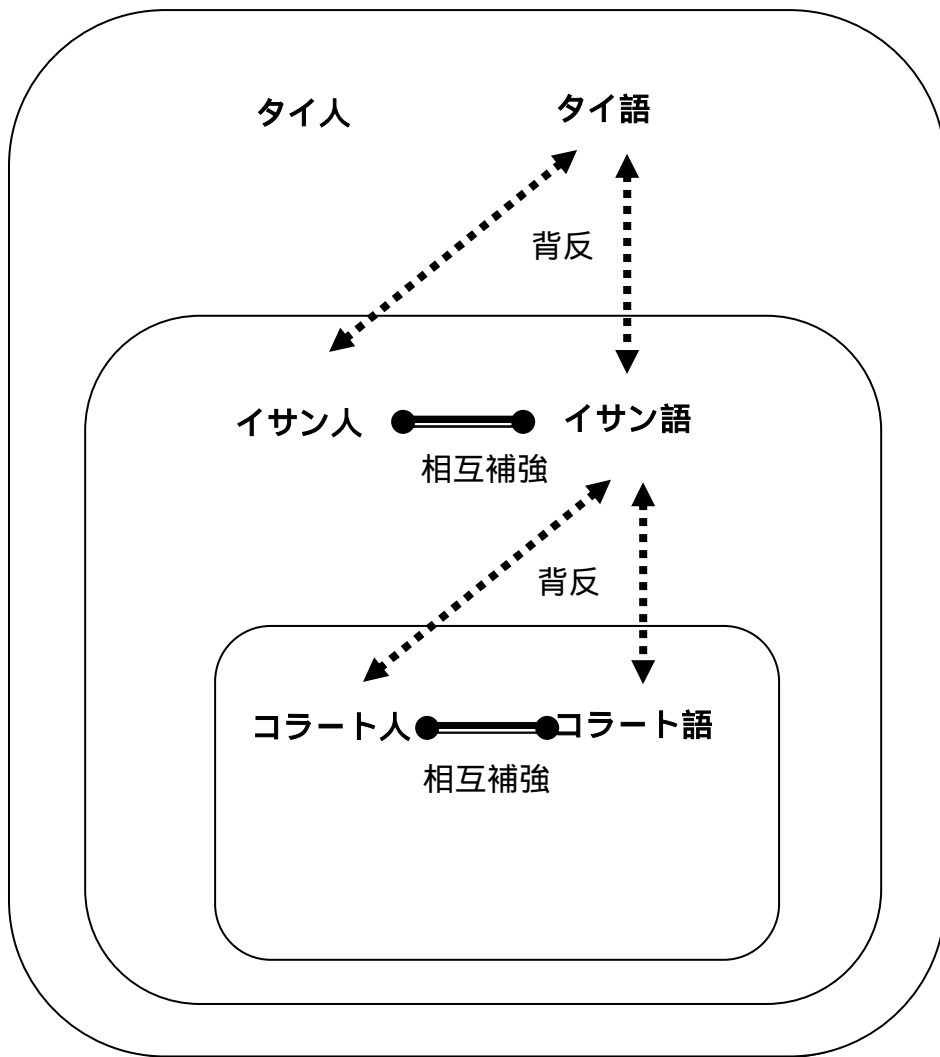
勿論、原則(2)と(3)が成立しない場合も容易に想定しうる。民族あるいはエスニック集団間の関係が悪化して紛争状態に至ったときには、任意の言語特に家庭言語と他の集団を代表する自称との間にも、任意の集団の自称と他の集団の言語との間にも、きわめて排他的な関係が予想される。原則(2)と(3)は、集団の関係が、本来的に望ましいか否かは別として、比較的良好である場合に成立すると考えるべきであろう。

この3つの原則は、東北タイの3集団・3言語の関係を事例として図式的に

次の図3のように示すことができよう⁸⁾。

図3 言語と自称

←…………→は背反的であることを、●——●は相互補強的であることを示す
枠の大きさは相対的地位を示す。



この図に見るように、本稿では自称、家庭言語、言語能力というごく一面を取り上げたに過ぎないが、言語と民族あるいはエスニック集団の関係はこれらの側面だけに関しても、決して一対一に対応するとき単純なものではないことは明らかである。

我々がここで導き出した原則は、東北タイにおける現象を矛盾なく説明できるが、そのことは上記の原則が普遍的に妥当し、一般化可能であることを直ちに意味しないのは言を俟たない。3 集団以上の関係を、本稿の方向とは逆にすべて2 集団の関係に還元して理解するほうが適切であるかもしれない。3 つまたはそれ以上の集団の関係として理解するメリットがあるとしても、東北タイの場合、国民国家形成が少なくとも相当程度進んでいるといった事情が、本稿で得られた結果に大きく作用している可能性も否定できない。タイ語、イサン語（あるいはラオ語）、コラート語の相互の言語的近縁関係と、タイ人、イサン人（あるいはラオ人）、コラート人の民族的近縁関係が影響を与えた可能性もまた否定できない。逆に、本稿で明示できなかった要因が大きく作用している可能性もありえよう。本稿で導出した帰結は、他の地域や国家との比較により検証、洗練されるべきであろう。この意味では、我々は言語と民族の関係に関する実証分析の小さな一歩を踏み出したに過ぎない。

註

- 1 タイ政府が実施する国勢調査において、民族や言語を問う設問が存在しないため、推定値に頼らざるを得ない（山下 2003: 12）。
- 2 コラート語を使用し、コラート人という自称を用いる人々はナコンラチャシマ県その近隣に集中する。詳細は、山下（2003）第6章参照。
- 3 ボスニアのムスリム集団のほかには、アジャール人（Bennigsen and Wimbush 1985: 207）、ポマク人（Minority Rights Group 1989: 118）などの例がある。
- 4 例えば、南米の先住民族ヴァウペス（Jackson 1989: 58-64）、フィリピンのモロ民族（山影 1988: 204-206）などを上げることができよう。
- 5 言語能力というより言語の共有意識や言語に対する愛着ないしは忠誠心が示威用であった事例として、アイルランド語の事例を挙げることができよう（Fennel 1990, Hindley 1990）。また、誇りや愛着の対象としての「価値言語」については、片倉（1987）、片倉（1990）を参照。
- 6 文字については、松尾（2000）を参照。
- 7 これについては、松尾（1993）を参照。
- 8 ワトソン（Janet Watson）は、イエーメンにおけるアラビア語方言について、図3と同様の同心円的な関係を示唆している（Watson 1994: 244）が、方言間の関係は議論していないし、民族やエスニック集団との関わりも議論していない。

引用文献

- Bennigsen, Alexander and S. Enders Wimbush (1985), *Muslims of the Soviet Empire: A Guide*, London: Hurst
- Connor, Walker (1987), "Ethnonationalism," Myron Weiner and Samuel P. Huntington (eds.) (1987), *Understanding Political Development: An Analytic Study*, Boston: Little, Brown and Company, 196-220
- Fennell, Desmond (1990), "Can a Shrinking Linguistic Minority be Saved?: Lessons from the Irish Experience," Einar Haugen, J. Derrick McClure and Derick Thomson (eds.) (1990), *Minority Languages Today*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 32-39
- Hindley, Reg. (1990), *The Death of the Irish Language: A Qualified Obituary*, London: Routledge
- Jackson, Jean (1989, 1974), "Language Identity of the Columbian Vaupe's Indians," Richard Bauman and Joel Scherzer (eds.) (1989), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, 2nd ed, Cambridge: Cambridge University Press, 50-64
- 片倉もところ (1987) 「異文化環境におけるムスリム - カナダにおけるアラブ・ムスリム社会の形成」, 『国立民族学博物館研究報告』, 12(3), 681-726
- Kedourie, Elie (1985), *Nationalism*, London: Hutchinson
- Keyes, Charles F. (1995), "Who are the Tai? Reflections on the Invention of Identities," Lola Romanucci-Ross and George De Vos (eds.) (1995), *Ethnic Identity: Creation, Conflict and Accomodation*, 3rd ed., Walnut Creek, CA: AltaMira Press, 136-160
- 松尾雅嗣 (1991) 「言語的差異：現実、認識、不平等」, 『広島平和科学』, 13, 73-99
- 松尾雅嗣 (1993) 「言語と民族に関するふたつの命題」 『広島平和科学』, 15, 27-52
- 松尾雅嗣 (1996), 「入れ子型言語紛争：同質規範と異質規範の拮抗」, 『広島平和科学』, 19, 189-203
- Masatsugu Matsuo (1999), "Language Differentiation and Homogenization in Nested Conflicts: Two Case Studies," *Journal of International Development and Cooperation*, 5(1), 87-102
- 松尾雅嗣 (2000), 「表記体系をめぐる紛争：文字紛争論序説」, 『広島平和科学』, 22, 75-114
- Minority Rights Group (1989), *World Directory of Minorities*, Essex: Longman
- Shnirelman, Victor A. (2001), *The Value of the Past: Myths, Identity and Politics in Transcaucasia* (Senri Ethnological Studies, no.57), Suita, Osaka: National Museum of Ethnology
- Singh, K. S. and S. Manoharan (1993), *Languages and Scripts (People of India Vol. 9)*, Delhi: Oxford University Press
- Smalley, William A. (1994), *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*, Chicago & London: University of Chicago Press.
- Watson, Janeet (1994), "On the Definition of Dialect with Reference to Yemeni Dialects of Arabic," Yasir Suleiman (ed) (1994), *Arabic Sociolinguistics: Issue and Perspectives*, Richmond: Curzon, 237-250
- 山影進 (1988) 「フィリピン・ムスリムのナショナルリティとエスニシティ」, 平野健一郎他 (1988) 『アジアにおける国民統合：歴史・文化・国際関係』, 東京：東京大学出版会、189-223
- 山下明博 (2003) 東北タイにおける言語と帰属意識、広島大学国際協力研究科博士論文